

## 「見る」ことの先にあるもの

加藤理愛

### はじめに

約3ヶ月続いた東京芸術祭ファーム(以下、ファーム)Young Farmers Forum(以下、YFF)の活動では、たくさんの人・新しい価値観と出会い、刺激的な日々を送ることとなった。YFFメンバーはプログラム全体を通して見学を行い、そこから自分が何を考えるかということに重きを置いて活動していた。見学・観劇→思考→言語化のプロセスの中で、想像力をフルに使い、時に道に迷いながらも、自分の考えが程よく整理され、視野がぐんと広がりはじめていると感じる。

大まかなスケジュールとしては、活動期間の前半はAsian Performing Arts Camp(以下、Camp)の見学・レクチャーWS受講、後半はFarm-Lab Exhibition(以下、Exhibition)の対面稽古見学、成果発表帯同を行い、その間にオンラインや劇場での観劇も行った。「コア期間」と呼ばれる最終週には、YFFのメンバーを初めとしたファームの参加者と実際に会って、コミュニケーションをとることが出来た。振り返ると、たくさんの出来事・作品を目にした、非常に充実した時間だった。

### コミュニケーションデザイン、ガイドライン

ファーム参加者のほとんどの人と初対面かつ、初めの2ヶ月はオンラインでの活動という、今までに経験したことのない人との出会い方・集まり方だったため、最初はどのように人間関係を築いていけるのか不安があった。しかし、コミュニケーションデザインの取り組みや、「東京芸術祭ファームガイドライン」の存在のおかげでその不安はすぐに消え、自分の役割に自覚的になって活動に参加することが出来た。皆が他者へのリスペクトを前提として活動していることがあらかじめ共有されたことによって、お互いを守ることにつながり、安心して活動に参加することが出来たのである。

特に印象的だったのは、Exhibitionの対面稽古初日にコミュニケーションデザインチームのチーフである田村かのこさんが各々の持っている仕事の提示を求めた場面である。作品のために自分がどのような役割を担っているかの認識をお互いに明確にすること、そしてそれを全体に共有することが、関係性作りの初期においてコミュニケーションを円滑に進める上でどれほど重要かを身をもって体感した出来事であった。このことは、ガイドラインの「プログラムをより良くするために」の項目の「自分の立場(地位、年齢、性別、国籍等)が、周囲に与える影響に自覚的になり、適切に発言・行動すること。」という文言に特に結びついており、どのような人間関係においても応用できること、すべきことである。

このガイドラインの存在は、年齢に少々のばらつきがあるYFFメンバー間のコミュニケーションにおいても有効に働いたのではないかと感じている。私の感覚としては、ほとんど年齢を気にすることなくメンバーと関わる事ができたと感じていて、今後は、今までに知り合った同年代とは一味違っ

た関係性になっていくのではないかという期待がある。代名詞の提示や自分の特権を自覚することなど、今回、コミュニケーションデザインに関して学んだことは、自分がどの立場になっても忘れずにいたい。

## オンラインの可能性

パンデミックによって、人が集まることのエネルギーを頼りにしていた舞台芸術の価値は揺るがされたと言っている。しかし、オンラインという選択肢を持った今、私たちはより強くなったと感じられたのがYFFの活動で得られたことの1つだ。特に、全面オンラインで行われたCampの見学を通してそれを強く感じた。場のファシリテーションと、オンラインでプレゼンテーションをする上での技術の相乗効果によって、離れていても感覚の共有が可能になっていたのだ。プロセスを見学できていたことの影響がどれほどあるかは曖昧なところではあるが、中間プレゼンテーションでもらい泣きをしたことや、最終公開プレゼンテーションの時間の経過があっという間だったこと、爆笑したことといった体験はかけがえのないものであった。個人的には、以前は苦手だったZoom上での無音に対する耐性が強くなってきていると感じていて、時間を共有していることの証であると捉えられるようになった。今後も、オンラインでのつながりが増えるにつれて、物事の共有の選択肢が増え、我々のアイデンティティの拡張がどんどん進むのではないかと推測する。

また、パンデミック下で数々の海外の作品をオンラインで鑑賞できるようになったことも可能性の一つとして挙げられる。多田さんがYFFのオンライン説明会の中で、他ジャンルの芸術に比べて舞台芸術では海外の作品に触れる機会が少ないことを指摘されていたが、劇場での観劇体験には敵わなくとも、どのような作品があるのかを知ることができるという点では有難い動きである。YFFメンバー間では、オンライン上の舞台芸術作品公開のムーブメントは辞書的な意味合いが強いのではという話をしたこともあった。実際に私は、東京芸術祭のオンライン配信プログラムで3つの作品を見ることができ、今まで触れてこなかった作家・作品に出会うことができた。

パソコンの画面を通して見たものと、自分の中の何かが実際に接続するという感覚や経験が増えれば、またさらにオンラインの可能性が広がったと言えるだろう。きっと今はその準備段階にある。

## 信頼

Exhibitionの稽古は、数多くのリサーチやワーク、それらについてのフィードバックから成り立っており、作品で使用されるイメージの共有のための時間がたくさんとられていた。通訳であるコミュニケーションデザインチームやアートトランスレーターアシスタントの方々がワークに入ることも多々あり、バックグラウンドの異なる者同士がお互いの理解を深めるため、そしてその橋渡しをスムーズに行うための工夫が随所に散りばめられていた。その一方で、ネスさんが序盤の稽古でおっしゃっていた、コラボレーションする時には全てを知る必要はなく、それが信頼である、という内容にすごく感動したのも覚えている。私はここに、知られたいことを知られないようにする「セーフ・スペース」の存在と、知らなくても大丈夫という寛容な雰囲気作りの重要性を感じた。期間の決まった国際協働制作の現場において、どこまで自己を開示するか・できるかは個人差があるだろうし、言語ではないコミュニケーションによって伝わるものもたくさんあるだろう。稽古を重ねるごと

に目に見えて現れてくるExhibitionチームの信頼関係の構築に、集団創作という性質を持つ舞台芸術の素晴らしさを感じたのであった。

## おわりに

現在の日本の感染状況は落ち着いているとはいえ世界を見るとその状況に差はあり、依然として予測のしづらい手探りな状況が続く中で、YFFに参加できたことは私にとって大きな励みとなった。私自身このプログラムへの応募の動機として、何を軸に舞台芸術に関わるかを見つめ直したい、ということも挙げていた。大学を卒業し1年目、より自由に自身の活動を展開できる状況に置かれた際に、その軸のようなものを明確にしておきたかったのである。今回の活動期間を経て、自身が踊ることを通して人々や社会と関わりたいという気持ちがより強くなったのはもちろんのこと、人を「見る」ことの先にある人間の想像力を信じて舞台芸術に携わっているということが私の中で明確になったと感じている。今回の経験を今後のダンサーとしての活動や、作品創作に存分に生かしていきたい。



加藤理愛（かとう・りえ）

— 東京（日本）

1999年生まれ。ダンサー、振付家。幼少よりクラシックバレエを始め、大学入学を機にアカデミックに舞踊を学ぶ。在学中より、テクニックの有無にとられないダンスを目指し、空間構成、人や物の関係性に焦点を当てた作品を発表。現在は、舞台芸術とコミュニティが相互に影響し合う過程に関心を持ち、対話を重視した作品創作に携わる。2020年より、ダンサーとしてIntegrated Dance Company 響-Kyolに参加。

<https://ripon13ts.wixsite.com/riekato>